



## 終活には「つつき」がある

毎日新聞東京本社で7日、日本葬送文化学会の創立30周年記念シンポジウムがあった。日曜日でテナントはほとんどが休業。ビルの中はしんと静かだったが、160人を超える参加者があった。

大型連休の最終日。司会を務めた私は、実は「50人集まればいいほう」と考えていた。何しろテーマは「終活ブームのつぎを本音で考える」。すぐ役に立つ話ではないし、「つつき」に何が来ようと関係ない。ふつうはそう考える。でも後日聞いたら、葬送関係者や研究者でもない新聞読者の参加がかなりあったらしい。皆さん本気で、真剣だった。

パネリストの3人は▽「無葬社会」の著者で僧侶の資格を持つ鵜飼秀徳さん▽40代▽葬送文化学会長で「お墓博士」の長江曜子・聖徳大生涯学習研究所長▽60代▽火葬場研究の権威、八木澤壮一・東京電機大名誉教授▽70代。私が50代なので、各年代がそろった。団塊世代がもうすぐ後期高齢者となり、日本は多死社会となる。自分が亡くなったあとのことについて多くの人が考え始めている。少し過熱気味の「終活ブーム」について、3氏ともそれなりに評価はしていた。ただ、それだけでいいのか――。

鵜飼さんは、昨秋、93歳で亡くなった祖母の葬儀で自分の子供たちに遺体を見せ、まだ温かい遺骨に触れさせた経験を披露した。そして「死を教育の現場に」と訴えた。長江さんは「いのちの大切さを伝えるのが葬儀。死者と語り合う場が墓」という言い方をした。住民との対話を通じて全国の火葬場めぐりに関わってきた八木澤先生も祖母が亡くなったときの話をした。終戦の年、故郷の新潟で八木澤少年はまきをくべながら、祖母の遺体の火葬をひと晩じゅう見つめていた。「あれが私の研究の原点。火葬場を迷惑施設という意識がおかしいのです」。会場で娘と孫も聴き入っていた。

人は死んで、それで終わりではない。終活には「つつき」がある。もし子がいなくても、近しい人に何かを伝えてくべ。その意識が必要だと気づかされた。

【社会部編集委員・滝野隆浩】

▽次回は6月5日に掲載